

## ノースリッジ地震雑感

東京大学社会情報研究所

教授 廣井 脩

### はじめに

今年の1月17日午前4時半頃、アメリカのロサンジェルス市を直撃したノースリッジ地震は、まだわれわれの記憶に鮮明に残っている。筆者はたまたま2月中旬から10ヵ月ほどアメリカに滞在することとなったので、2月から3月にかけて2度にわたってノースリッジ地震の被災地をたずねたり、防災関係機関や地元住民に話を聞く機会を得た。

被害のくわしい紹介はすでにかなり行なわれているのでここでは省略したいし、また筆者はこの地震について住民や企業へのアンケートを含めたくわしい調査を予定しているので、専門的見地からの分析も別の機会に譲ることとする。ここでは、被災地を訪ねた印象を、とくにわが国の防災対策との違いに焦点をあてて記していきたい。言葉の障害もあって、現地のお話をどれだけ正確に把握できたかは多少問題だが、それでもいくつか気がついたことがあったし、それはわが国の今後の防災対策の参考になると思われるからである。

### 1. 行政機関の対応

まず、ロサンジェルス市や周辺のカウンティ(郡)などの行政機関からはじめると、これらの機関を訪ねてとくに強い印象を受

けたことが二つあった。その第1は、大地震など緊急時の行政機関の役割がわが国にくらべて相対的に小さいこと、第2は、事前に決められたマニュアルを厳密に守って緊急対応を行なうより、状況に応じて柔軟に対応しているということである。つまり、第1点はこういうことである。わが国と同様に、アメリカでも災害が起こったとき中心に対応するのは市やカウンティのような地方防災機関であり、食料・飲料水の備蓄や防災広報などの事前対策、避難勧告・指示の発令や避難所の開設などの応急対策は市とカウンティの仕事である。州や国はその後方支援あるいは財政支援を行なうことになっており、これは、わが国における市町村、都道府県、国の役割と基本的に同じといっていであらう。しかし、ノースリッジ地震のときの市やカウンティの対応を聞くと、たしかにガス漏洩による火災発生地域に対する避難勧告の発令や、消防活動・救急活動などは行政機関が中心になって行なったが、もう一つの重要な仕事である避難所の開設と運営に関しては、赤十字や救世軍などのボランティア組織にほぼ全面的に依存したということである。筆者は、1992年に起こったハリケーン・アンドリューの調査で渡米したときも同じことを聞いたが、わが国と同

じようにアメリカでも、法的には避難所に関する責任は行政機関にあるというものの、実質的にはその仕事をボランティア組織に任せているのである。こうした措置によって、そうでなくとも多忙な行政機関の作業がいちじるしく軽くなるとともに、避難所の被災者に対しても、さまざまな専門知識を持つボランティアによってよりキメの細かい対応が可能になる。たとえばハリケーン・アンドリューのときは、避難所を運営する赤十字が特殊な病気を持つ被災者と心身障害者のリストを作り、これらの人たちに医療や食事について特別の配慮をしたと聞いたし、今回も、地震のショックによって精神が動揺した人たちにボランティアの医者や心理学者が心理療法を施したという話を聞いている。アメリカでは、災害から自分を守るのは自分自身であって、行政の責任ではないと考える人が少なくないが、これに加えてボランティア組織が大きな役割を果たしているのが、なおさら行政の負担は軽いのである。わが国では、歴史と実情が違うからアメリカのやり方をそのまま適用できないが、行政機関の負担軽減のためにも災害時のボランティアの活用ということをもっと積極的に考える必要があるのではないだろうか。

次に第2点に触れると、今回の訪問では行政機関からも放送など他の機関からも、事前のマニュアルにあまり頼らず臨機応変に対応したという話を耳にした。ロサンジェルスとその周辺はわが国に劣らず地震の多発地域であるから、それぞれの機関はもちろん地震時の対応に関するマニュアルを事前に作っている。しかし、それはあくまで原

則を記したものであって、今回の地震ではこれに全面的に依存しなかったというのである。

今回の地震が職員のほとんどいない午前4時半に起こったという事情もあったと思うが、このやり方はよくいえば臨機応変、しかし下手をするといきあたりばったりになってしまう、必ずしも肯定できるものではない。ただ、大地震はいつ起こるかかわからないし、予想を超えたどんな出来事が発生するかもわからない。今回も、被災者に対する事前の食料・飲料水の備蓄ではどうも足りず、急遽民間企業から寄付を仰いだという。なかにはビール会社が仕事を休んでビール瓶に水を詰め、大量に被災者に提供したという気の利いた話もある。残念ながら、これは日本から進出した企業ではなかった(余談だが、現地の日本企業のほとんどはまったくといっていいほど地震のことを念頭においていない)。おそらくアメリカでは、いつ起こるかかわからない災害に対して事前に多くの投資をするより、災害が発生した後で最善をつくすほうがベターだという特有のプラグマチズムがあるのだと思うが、事前対策に相対的に力をいれるわが国との違いを考えさせられたものである。

## 2. 住民の対応

次に、ノースリッジの住宅街で行なった住民への聞き取りの印象を記してみたい。ノースリッジは今回の地震による被害がもっとも大きかった地域の一つで、居住不能になった家屋も少なくなかったし、多くの住宅が煙突や塀が倒壊したり、壁に大きな亀裂が入ったりしていた。

住民の話では、地震の揺れによってほとんどの家具が倒壊し、観音開きの戸棚が開いて中のものがいっせいに外に飛び出したという。これは昨年1月の釧路沖地震の状況とそっくりであり、釧路と同じくノースリッジでもほとんどの家庭で家具を固定していなかったためであるが、訪問したときに、余震に備えて観音扉の把手にひもをかけている家もあり、これも釧路とそっくりなのには妙な気がした。またベッドに本棚が落ちてきたり、シャンデリアが落ちてきた家庭も少なくなかった。とくにシャンデリアの件は重要である。釧路沖地震のときの2人の死者のうち1人はシャンデリアの落下によるものだったが、この重量物の直撃を受けたらたまったものではない。また直撃されなくとも、床に割れたガラスが散乱し、それを踏み抜けば大怪我をしてしまう。現に今回もそうした人が何人かいたようで、夜中の地震ですぐに停電してしまえば、履物を見つける前にガラスを踏み抜く危険性がずっと高くなるのである。しかし、ベッドの横に靴をおいていた人は家の中がめちゃくちゃでも怪我をしなかったのも事実であり、当たり前のことだがこうした配慮も非常に重要だと思った。要するに、わが国でもアメリカでも住宅街の被害は同じであって、家庭内地震対策として家具の固定や落下物対策の重要性を再認識し、これらのいっそうの促進を図ること、とくに観音開きの扉と照明具の危険性を周知することが重要だと、改めて認識させられたものである。さらもう一つ、住民の話をうかがって感じたのは、地震のショックが相当に強く、精神的不安定がかなり長期間続いたという

ことである。なかには、あまりのショックのため地震ノイローゼになった人もいたし、それほどでなくてもしばらくの間よく眠れなかったとか、ときどき地震の夢を見て恐怖を感じたとかいう人は少なくなかったらしい。ロサンジェルスに帰省していて地震にあったサンノゼ大学の学生は、地震の数日後大きな地震がまたやってきた夢を見てあわててベッドを飛び出し、家具にしたたか顔をぶつけて大怪我をしてしまった。筆者はその学生からじかに話を聞いている。突然の大地震はそれほどまでにショッキングなのである。大正12年の関東大震災をテーマにした小説の中に、地震のあと地震の話の聞くと恐怖のため小便をもらしてしまいうちの子供の話があるが、とくに子供にとって地震の恐怖は大変なものであろう。そのため今回の地震後、こうした被災者のために、なかでも子供たちのためにソーシャルワーカーや心理学者、医者などが恐怖を和らげ安心させるためのさまざまな活動を行なっている。つまり、地震による肉体的被害や経済的被害ばかりでなく、被災者の精神的障害の解消ということも地震対策の目的の一つになっているのである。わが国では、この方面の対策はまだほとんどなされていない状態であるが、昨年の北海道南西沖地震の後に筆者らが行なったアンケート調査の結果を見ると、奥尻島の避難所の人たちの多くがもっとも感謝したことは、金銭や食料・衣料品の提供ではなく、ボランティアが親身になって相談にのってくれたことだと答えているという事実もあり、被災者に対するこうした精神的援助の充実は、今後の課題の一つといえるのではないだろうか。